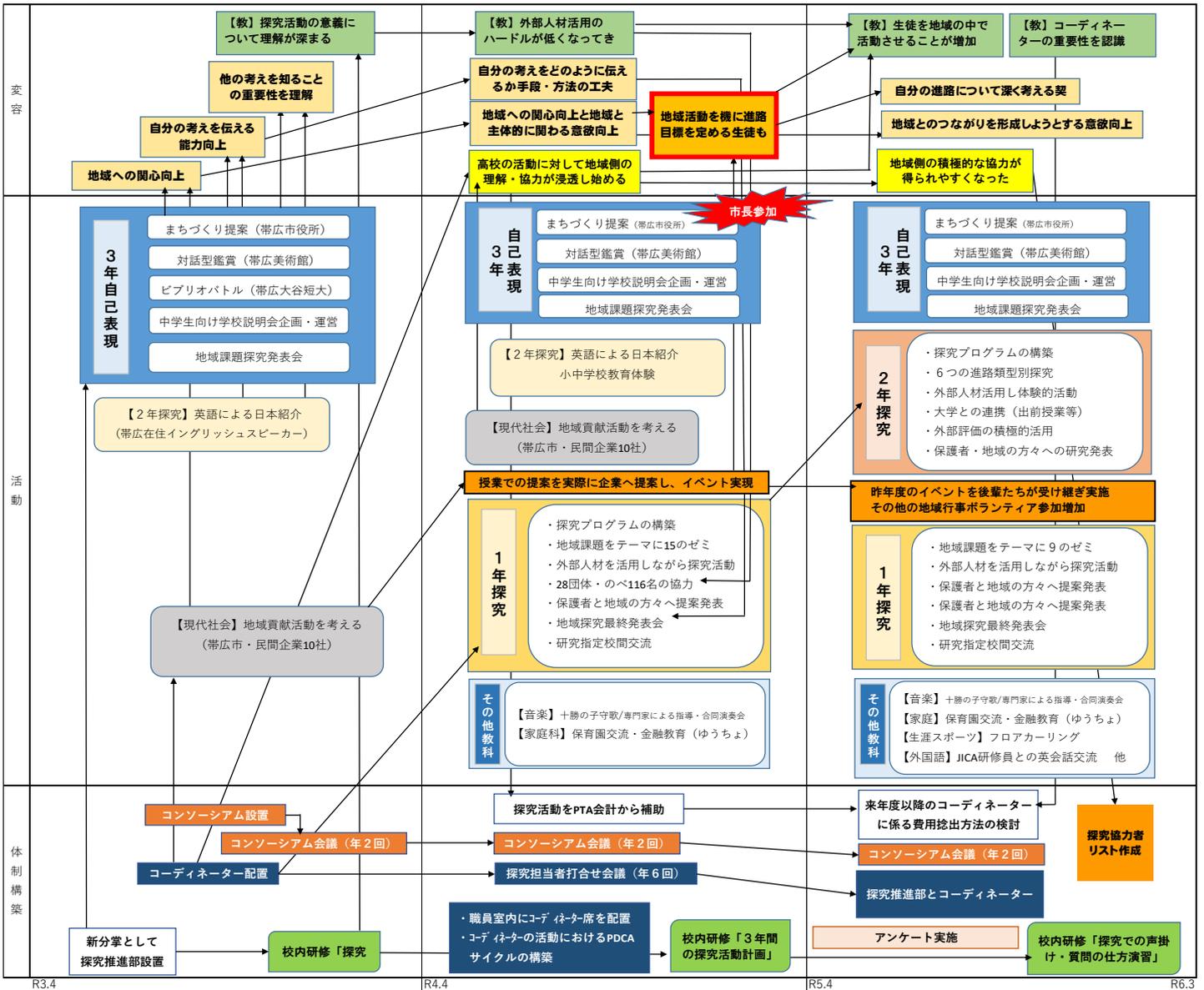


問われるところがある。活動の責任の所在や事故が起きたときの対応など、様々な状況を想定していく必要がある。社会教育的な活動母体がある場合、この活動は、「生徒も一住民として参加する」と捉えるなら、活動母体の活動として整理することができる。そう考えると、活動の受け皿になり得る社会教育的な団体がコンソーシアムに入るなどして、「課題活動を引き受ける」という体制づくりができると、生徒の校外での主体的な地域活動が進めやすくなるかもしれない。この点は、取組が活発になるほど出てくる課題であり、どのように線引きするかを整理する必要がある。

⑤変容

高校から3年間の活動とその影響を時系列でまとめたものを以下のとおり示していただいたので、それに基づき考察する。

時系列での活動一覧



(令和5年度 北海道帯広三条高校)

- ・地域 Co の配置により地域学校協働活動を実施。授業で考えた「地域貢献活動」を企業に提案し、イベントを実現。実現したイベントを後輩が受け継ぎ実施するとともに、そのほかの地域行事やボランティアへの参加も増加した。

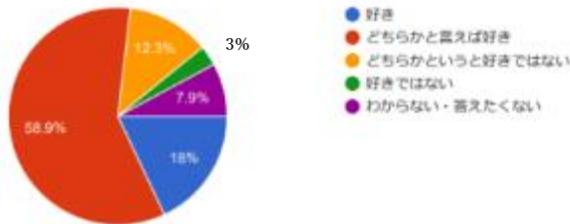
- ・教員の外部人材の活用についての意識については課題があったが、地域学校協働活動が活発に行われることで教員が探究の意義について理解を深め、外部人材活用へのハードルが低くなる。生徒を地域で活動させることが増加するという活動が拡大していくスパイラルが動き始めた。
- ・生徒も地域学校協働活動をとおして、地域への関心を深め、地域と主体的に関わる意欲を持つようになる。地域との関わりをきっかけに、進路目標を定める生徒が出てくるなど、社会と自分の生き方を結びつける様子が見られた。
- ・地域も高校との活動が広がる中で高校への理解が促進され、さらに活動に協力的な姿勢が見られるようになってきた。
- ・地域 Co によるこの3年間の地域とのつながりは、教職員にも受け継がれ、探究に関わる人材をリスト化するなど、つながりの継続・維持を進める動きが出てきた。

また、地域活動について、地域学校協働活動実施後の生徒にアンケートをとっている。実施後に実施前の自分を振り返って比較してもらった。質問の1と3は、「地域についての愛着」、2と4は、「地域活動への参画意識」について聞いたもので、結果は、以下のとおりとなっている。

< 1 は地域学校協働活動実施前、3 は地域学校協働活動実施後の地域への愛着について >

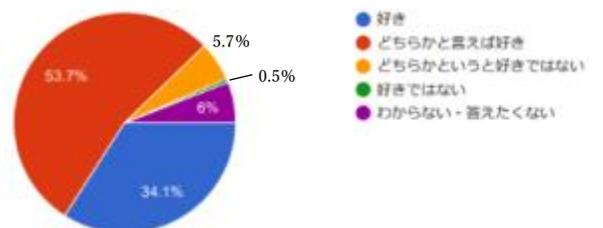
1 みなさんの地域への愛着について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わる前は**、地域や社会に対してどのように感じていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

367 件の回答



3 みなさんの地域への愛着について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わってからは**、地域や社会に対してどのように感じていますか。一番当てはまるものを選んでください。

367 件の回答



「好き」「どちらかと言えば好き」を合わせると、

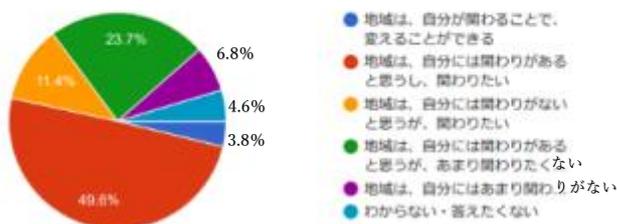
(事業前) 76.8% (282人) → (事業後) 87.7% (322人)

となり、地域に愛着をもつ生徒は明らかに増えている。

< 2 は地域学校協働活動実施前、4 は地域学校協働活動実施後の地域活動への参画意識について >

2 みなさんの地域活動への参画意識について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わる前は**、地域や社会に対してどのように考えていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

367 件の回答



4 みなさんの地域活動への参画意識について聞きます。みなさんは、総合的な探究の時間等において、地域の方と**関わってからは**、地域や社会に対してどのように考えていましたか。一番当てはまるものを選んでください。

367 件の回答



「地域は自分に関わることで変えることができる」と答えた生徒は、

(事業前) 3.8% (14人)  (事業後) 19.9% (73人)

「地域が自分に関わりがあるかないかは別にして、地域に関わりたい」と答えた生徒は、

(事業前) 61% (224人)  (事業後) 76.8% (282人)

となり、地域と関わることで地域を変えられると考えている生徒、地域に関わりをもちたいと考える生徒は、ともに大きく増えている。

<総合的な探究の時間をとおして、どのような点が成長したと思うか。(複数回答)> (回答数 367)

4 課題を見つけることができた	214
8 他の人の意見を尊重できた	204
5 課題解決のための情報を集めることができた	200
10 課題解決のために、他の人と協力できた	197
6 集めた情報を整理することができた	172
3 探究することの意味を理解できた	161
2 調べたことを使う力が身についた	144
12 よりよい社会づくりに貢献したいと思った	138
7 集めた情報をまとめたり、表現することができた	130
9 自分から課題解決に努力できた	124
1 社会の仕組みについて知ることができた	115
11 自分の生き方と社会の関係について考えた	71
13 わからない・答えたくない	9

<総合的な探究の時間をとおして成長したきっかけは何だと思えますか(自由記述)から一部抜粋>

- 自分たちの授業のために良くして下さる地域の方々に感謝の気持ちを持ったので、社会に対して積極的に動くことができるようになった
- 現在、地域をよりよくしようと働いている人から、直接お話を伺うことができたこと。実際に働いている人と関わることで、関わる前よりも近い視点で、かつ新しい見方で考えることができた
- 地域と向き合う機会を与えられたから
- 実際にその仕事をしていたり、目指したりしている方々の話を聞いたりして、自分もそのことをいろいろな場面で活かしていこうと思ったから
- 地域の人のお話で、お店や施設の経済の仕組みを知ることができて、それをきっかけにどんどん計画を自分事化してグループで考えられるようになったから
- 課題に対して、自分事化するようになったこと
- 地域について積極的に考え、世界との違い、課題を自分事として考えたから
- 探究していくうちに、多くの課題が見つけられて、そこで自分に関わりのあることを見つけられた
- 自分が地域との関わりがあり、大切なことなんだと思ったから
- 課題に対して、知ろうともしていなかったが、探究をとおして課題について知り、もっと知りたいと思ひ、同じ課題について考える人と話し合いをしたから
- 探究の時間を通して、地域が思っていた以上に身近で、自分次第で地域に貢献できることを知った
- 地域にある課題を自分たちで解決することによって、よりよい社会に変えられることを知った

- 長岡さんのおかげで繋がれて会うことができた、色々な国の人達と話して、十勝の改善すべきことなど、たくさんの情報を集められたこと
- ボランティア活動で子どもたちと関わることができたこと
- 地域のことを調べていくことで興味関心が湧いてきたため
- 自分の興味がある分野について探究することで積極的に探究して課題を見つけることができた
- 実際に現場に足を運び、自分自身が現状を体験することができたから
- 初めて関わる人と協力して活動することで、信頼関係を築けたこと

（令和5年度 北海道帯広三条高校 生徒へのアンケート調査）

アンケートからの考察

- ・特に、「地域を変えられる」と考える生徒が大幅に増えたことは、地域の担い手となる原体験ができたとも捉えられるため、非常に大きな変容であると考えられる。
- ・こうした体験により、十勝（地域）に愛着をもって一度外に出た人材が学びを積んで、数年後、再び十勝に戻ってくるようになるのではないか。そのような結果が出たならば、帯広三条高校のチャレンジが十勝の地域創生の重要な人材育成につながったということになり、多くの地域が地学協働による人材育成を進めるべきだという一つの根拠になると考えられる。
- ・生徒の感想から、地域の大人との関わりが地域社会への理解を深め、「自分にも何かできる」「社会の仕組みを知ることができた」といった、社会と自分の統合ができてきた。これは、社会に出る上で重要な準備である。
- ・探究の性質上、主体的な学びが展開され、それにより生徒が地域課題を自分事として捉え直していることがうかがえる。
- ・地域の協力者や地域 Co に感謝の意をもつ生徒がおり、生徒自身の探究による学びが大きなものであったことを示している。

進学校が地学協働に取り組むことについて、違和感を持つ人がいるかもしれない。今までの知識偏重型学力の中で生きてきた、古き大人たちの進学に対するイメージだと思われる。確かに、大学の入試改革がはじまっている現時点においても、知識が重要な受験の要素であるし、進学に対して現実的に受験勉強の必要性がなくなっているわけではないが、総合型選抜では、明確に大学を志望する理由やこれまでの地域社会等における探究の実績が求められており、地域社会での体験や対話を通じて、将来のキャリアデザインができた生徒は、目標実現のために主体的に学習する傾向にあることも示されている。

実際に、帯広三条高校の生徒の中には、探究をとおして自分のやりたいことを見つけたことにより、意欲的に学習するとともに、志望理由を自分の言葉でしっかりと語るができるようになるなど、総合型選抜を勝ち抜いて進路実現した生徒も出てきているという具体的な成果が見られている。

⑥ 3年間のまとめ

<成果>

- ・地域活動の実践者が地域 Co となり、校長との熱量のバランスが活動推進につながった
- ・地域 Co が探究に関わる人材への説明・必要になったときの協力依頼を先回りして行ったことで、生徒の主体的な探究が進んだ
- ・「授業改善」についての研修により、教職員の「探究」に係る意識が高まった
- ・当初、若手教員を中心としたプロジェクトチームが地学協働を推進し、当事者意識を高めた
- ・地域 Co は、つながりを教職員も継承していく意識付けを行っていた
- ・探究の企画を教育課程外で実施する活動に生徒有志が参加するようになった
- ・課外活動を公欠で後押しするなどの仕組み作りを進めている
- ・地域 Co 配置から地域学校協働活動展開、企画の実現、生徒有志による地域活動の活性化、教員の意識向上、生徒の地域への意識向上、生徒の進路実現、地域人材の高校への協力姿勢、と活動がプラスに回るスパイラルができています
- ・生徒の「自分に社会を変えることができる」と考える人数が明らかに増えている。高校の活動の質や生徒の主体性の発揮など、自分たちの活動が実現し、地域の人々が喜ぶなどの成果を上げることができたことによると思われる
- ・地域での探究をとおして、進路志望理由を自分の言葉で語れる生徒が増えた
- ・外部人材とともに生徒の探究を支える体制づくりができた

<課題>

- ・地域 Co の持続的な配置
- ・教員の「指導する」から「地域人材とともに伴走する」というスタンスに対するマインドセット

⑦資料（資料編に掲載）

- 帯 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
- 帯 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》
- 帯 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）
- 帯 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
- 帯 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
- 帯 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
- 帯 7 全道地学協働活動研究大会発表資料
- 帯 8 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）